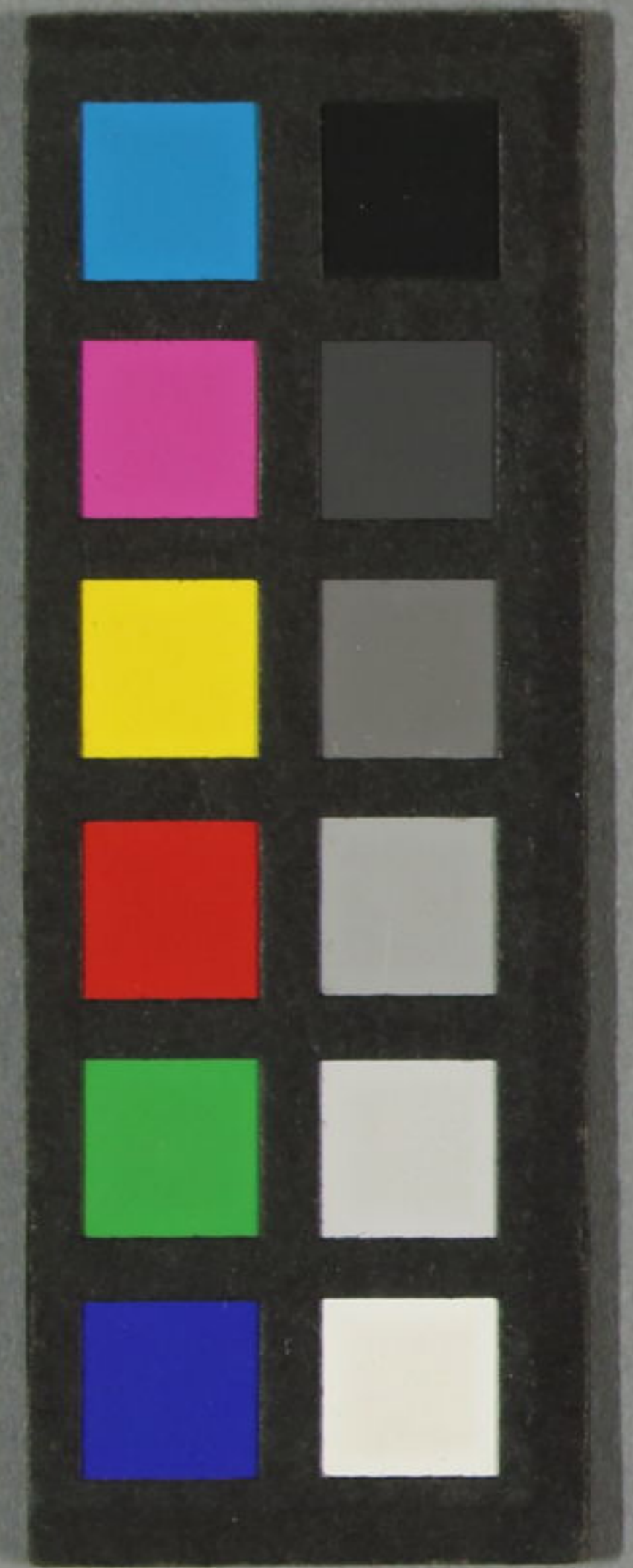


枇杷園七部集四編

5
4631
4



1834

法法花經 草すうう 草とくう 菴の文
ワうつと 草すうう 草すうう 草

枇杷園七部集四編

尾陽 東隣堂藏



法法華經 黃鶴品序

人の終焉は多岐にわたるを以て勝をたつ
たりあるか時々の幸ぬる日の泪の
うへよのくろくものうもむらりハきま
かみしと云ふハなまなき世にわたり
るて終焉は世にわたり花の家
たりのけくぬらむと云ふ終焉は
う免のまよふころぬる時人

昭和十六年一月十一日 寄
尾野貴英氏 贈

法法華經

好... 魂をなくさしむる... 情のありやりの... 是法花經... むりを追慕す...

朱橋叟士朗の

批七次四上一

法花華經黃鸝品第一

白圖
岳輅
士朗
徐英
騏六
白圖
岳輅
士朗
徐英

のりまゝにみまゝにき 組板
古つたまゝにちりまゝにき 松の風
よるに長きみ 建つて 岳の
まゝにまゝに月ハ 破ふたよひて
妻をうめたる 海草に 岳やま
おんろのまゝに 陽を 方ハ 立すま
柳の 繁るに けしき ちり
登りて 家の子 木の 極 年 みるく
あゝを 惜めと せし む丁う子
旅人の子 笠を 着るく 小 登
衣の子 やりまを ちきま 嬉し け

駿六 昆明 方明 白圖 岳輅 士朗 徐英 駿六 昆明 方明 白圖

批七款四上三

子の業は 髪を さらす 夕の 夕の 白 暮
燕の 巣に 水ま けり けり けり けり
うらまゝに まゝに まゝに 馬を 追ふて
木戸を なるめ 小 舟の 大
今つた まゝに 昆陽に せし けり 後
松の 雀の 世を ちきま たる
味嚼み 鳥の とき ぬ 楚を 引まゝぬ
野子 舟の 舟を 流り 出ん
まゝに 杖を 何れ けり けり けり 月
小 笠の けり けり けり けり 務
鴨 突 後 承 けり けり けり けり

岳輅 士朗 徐英 駿六 昆明 方明 白圖 岳輅 士朗 徐英 駿六

批七款四上三

南無阿彌陀佛と下結を踏込
 情くるるくハ人の何事か
 又とらくおもひ死く一きり
 懐をたぬ末の百と月を懐て
 生約つ山をくくく喜風
 心雲
 士朗
 方明
 白圖
 岳輅
 昆明

枕七終四ノ上三

竹まきくまきせみ日
 方明
 徐英
 羅城
 玉湖
 壽麓
 杜常
 槐圖
 自樂
 素圃
 林亦

竹有
 素剛
 猿左
 岱青
 墨山
 王政
 龍藏
 方明
 榲堂

青柳品第二

竹有
 素剛
 猿左
 岱青
 墨山
 王政
 龍藏
 方明
 榲堂

批七款四上四

蓬寺星流をこて星宮の邸居を
 訪ふ途中の口号

春柳のや日も暖そあけしるき
 川とち雪降柳くもりけ
 春柳のちやんそちゆる色相田
 けり乾の柳あけしる小池
 春鳥柳はまきり華ふりり
 春柳曲衣を垂ひりり落葉川
 春柳ふけりめて月の長閑
 月ふるるは梅のさけりる色相柳

寄白園老人

騏六
 入素
 素外
 天老
 百池
 大阜
 魯雄
 棋價

柳極く人思ひくあうまうか
生る極ふまふ分の隙を望まはり
新かたりく柳のちりこの南
まろの東の雲ふ極の一あうり
まろ極ふあやふふ家のひとつは
夕柳のあうくと日ふてあうり

梅花品第三

九成
大江丸
素兄
岳輅
士朗
垂満

批七款四ノ上五

雪消く子る遊戸 柳のさうと
何ひとあまうとあぬまの夕雲を
月影あうりあうりあうり
あうりあうりあうりあうりあうり
算んあうりあうりあうりあうり
四方山のまろまろをあうりあうり
寺あうりあうりあうりあうり
きぬあうりあうりあうりあうり
耳搔あうりあうりあうりあうり
あうりあうりあうりあうりあうり
麻あうりあうりあうりあうり

士朗
岱青
岳輅
桂五
少汝
斗入
羅城
士朗
岱青
岳輅
桂五

すてゑのりし年をのりぬの
御裏の山影のうつろふ
鳥の心もや守る葦をたてこめ
月も出さずとも 雉鳴南より
石のうらやて一里を二里も
六田の山をよみよみふ陽
借玉の山もやまをりし
竹の影を拂ふよき
むらぬの山影を八枚の
糟船の山影を
岳外の山影を

少汝 斗入 羅城 士朗 岱青 少汝 桂五 岳輅 斗入 羅城 岳輅

批七幼四上六

あつた山影を
高き山影を
おもしろい山影を
志の山影を
芙蓉の山影を
うらやま山影を
鶏の山影を
葉子の山影を
山影を
山影を
山影を

岱青 士朗 桂五 少汝 士朗 羅城 斗入 岱青 岳輅 桂五 羅城

花をば中 重なるくさふぬふり
雲をば中 重なるくさふぬふり

斗入
少汝

蓬萊の先ひらくや 冬之梅
つらねの梅 冬之梅

天老
旭雲

お路の社前

う免の花白きハ 神のふらぬ
ひりふんよとてくさる梅の花
あふりあふりあふりハ 梅の花
鳥探の梅 冬之梅

長壽
玄光
碩松
柳庄

批七の四上七

梅の香や 梅の香
う免の梅 冬之梅
横長の梅 冬之梅

竹有
杜石
士峰

春宵一刻 價千金

梅の香や 梅の香
岩井の梅 冬之梅
老木の梅 冬之梅

大魚
逸漁

よふに 梅の香
お梅の梅 冬之梅
難波の梅 冬之梅
志の梅 冬之梅

卓池
文兆
月居
外六

うらんうあやほまつくむきこのぼと
 元志めて月いへくまも梅のま
 うめうき香やをまくと月のおうも
 枯井垣ふまのふくくすまて小華
 文のまてあをま女のまのとりふ
 甲んといふふ
 梅う番ふぬまてもまをき月後
 山う梅んふゆん十本うあ
 青は梅増まの座も白あつ
 山里ハ狭きまのまうりうまのま
 雲うて梅あつくとまのるふ

多松
 呂利
 左誥
 卓出
 魚
 大馬
 寿松尼
 方朔
 冬彦
 騏六
 白図

批七款四上八

ひとつはうこくやうや梅のふ

表傑

春雪品第四

春の雪梅のまほもま
 風をまうくうけたら小雪哉
 ちもふやとあぬもあつまの香
 志るの梅方ふけりけり
 素ふみまうらまをくら命衣着て真ひゆり
 あつま雪の降るおほまもはあ命

自樂
 桂五
 松凡
 素
 紀鳳

水鏡塚

霧陰の山花つく夜におもろ月
舟をくく人も這出とおもろ月
山をみみ藤あえくちかき月
あしーつて夜はあけぬ寝つき

素外

紀鳳

重羽

桂五

鳴蛙品第六

漸くさ人ふくせよきあく陸
鳴出く田あくをふ守陸を果

蕉雨

大阜

批七款四下

重くさりふくせよきあく陸

白圖

陸あくく浪のあちくちあふよきぬ

子繩

春の白雲の底はくちり啼くつら

墨山

鳴蛙のきり新陸はあくりくちり

芦丸

豊川とくく雨は日くちりて

るたつひに陸はあちり山あくちり

帯梅

浪戸山あき

陸あくく垣あき桑の木の葉下外

岱青

をまきりくくあきくそくと鳴蛙

友圃

山吹ふさつら陸のよきくこの月

入素

陽炎品第七

あけろくわやゆふりと落る鴨牛
 机あちりをさうらふまろこま
 大せつまをふる古橋の夏長く
 浪のきこゆるおのちあはれづらあり
 けしるうもつるおのちあはれづらあり
 雑木の多き宿の林 風
 まきやうが茎を平たらし刈拵て
 大畑とのく温泉ハ沙汰を

士朗

岱青

帯梅

紀鳳

大阜

墨山

岱青

士朗

批七款四上士

尾形前の穂の枝もまるとつ
 帳小籠とんぼ色生お くらま
 おきんやま鳥ふきしる部
 隣お南のかくく元のやま
 月逢き吹革糸をたれ子磨り
 船碇かきり 悪のありき
 東辺よりくきき 髪を送る
 志おゆくおおちちくおお
 山鏡お色を負ふ紐ををふ
 年を送つら 六十 かな 録
 秋の書小鳥乃らつく 窓の外

紀鳳

帯梅

墨山

大阜

士朗

岱青

帯梅

紀鳳

大阜

墨山

岱青

嵐花這入る、袋をりたるを
張衣花汗ふ華る、佛一を
葦もす、花もさる、海の花
ゆけハ又、と、紗、麻、砂、の、と
阿、く、花、も、ろ、や、身、の、空、の、版
初、房、を、し、喜、を、未、末、の、層、は、き
ゆ、あ、く、を、ひ、き、く、ハ、月、の、月
初、房、を、し、破、の、小、房、は、足、付、なり
中、の、と、の、く、と、と、さ、の、さ、の、さ、の
月、花、うち、花、涙、を、よ、ふ、と、め、ら、せ
更、て、あ、く、く、色、む、白、く、き

帯襟 墨山 士朗 紀鳳 大阜 帯襟 岱青 士朗 紀鳳 岱青 墨山

批七勢四上十二

あつり花、花、の、鳴、や、り、ん
あつり花、花、の、湖、の、花、雪
ち、の、花、を、見、ふ、ゆ、く、人、の、絵、を、て
か、り、花、や、と、り、を、む、す、ふ、紫、殿
夕、堂、も、ふ、も、障、の、喜、の、ひ、き、合
む、く、く、石、の、ぬ、き、る、む、く、る
陽、も、小、神、を、う、く、く、く、く、中、の、花
か、け、ろ、ろ、よ、や、刀、う、く、く、眠、る、人
の、け、ろ、ろ、よ、や、神、ふ、さ、き、く、く、松、の、脂

大阜 帯襟 紀鳳 士朗 墨山 岱青 長壽 斗入 卓池

陽矣や河を方清りねるおひま 羅城
 かけろくやね葉てぬくふ沖四 氷如
 かけろくや馬の尾つゝ半の尾 白圖
 陽をやまはけふはくは砂のと 少女
 うけろくや人ふまのまゝるまゝの葉 徐英
 混雜品第八
 陽をやまふとすむおくお蝶 白居
 葉くくやまをい何の葉もあゝ小ね石 物裁

批七於四上十三

陽をいこの清水をねるふ沖のまゝる 秋賦
 葉くくやまをい何の葉もあゝ小ね石 兼幽
 うけろくや人ふまのまゝるまゝの葉 其谷
 陽をやまはけふはくは砂のと 青阿
 かけろくや馬の尾つゝ半の尾 美人
 かけろくやね葉てぬくふ沖四 手當
 かけろくや馬の尾つゝ半の尾 一之
 陽をやまはけふはくは砂のと 唐水
 山居 圃雅
 葉くくやまをい何の葉もあゝ小ね石 艸人
 陽をいこの清水をねるふ沖のまゝる 蛙聞

表半結冬川流能言未な〜ハ何 可董

維子の夢月ハむらねふりなり 寶圃

淡海道中〜 沙漠

下日ハ風亦碎たりまゝハ旅 五明

風もす〜二月の新男 襟價

霧を重まの〜ひらけ〜蝶の壳 関叟

送人 庭甫

松の先ふまき〜枯の風 臥史

灌園 庭甫

橘や何家とらまき〜砂のよ 庭甫

うら〜松〜心もあら〜萩の爰 庭甫

批七約四上五

落葉を能知る方子〜旅ハ何 庭至

二日刈若小二日の志〜志〜の志 五周

前〜〜〜〜〜 大左

雪〜〜〜〜〜 垂童

鉦鐘中〜〜〜〜〜 巢兆

山崎下り〜〜〜〜〜 如毛

穂〜〜〜〜〜 仙布

漁舟小萩のよ〜〜〜〜〜 仙室

そ〜〜〜〜〜 柳涯

を〜〜〜〜〜 啓甫

ま〜〜〜〜〜 大年

みくしり望みきき 雲ふ散りり小雲帖
思ひ出にこころ秋の夕々菊
蝶くハひくつ 菊もも終り也
月影よ舞のうげを 菊よ
ふりうり鳴や小麻の花すまき
おぬ扇はくひまよまのさき
二日んまふゆらぬぐりの花
きのふふもくも咲たりりり
薄雲山沖め 糸見ゆりりか
来くくくの里さくくたり山のこ
やむくくふまを 糸をハ秋の露

松人 葛麻 雨滴 多宜 珉丈 春晓 其成 魚日 带棋 昆明 蘭水

批七初四上十六

あさ寺小一軒をくく

紀鳳

梵とも其軒をくくして 秋の月
おほくこの人ハ なるり 秋の月
味唾 壇の浮世尋ん 香るる香
山寺やまよりハ ますくく
むくくよりくくくくくくく

羅城 岳輅 岳輅 少汝 士朗 岱青

寛政十年正月

撰者

岳輅 岱青

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

概七初四上十七

學子四王六

草枕集

字よらうき尾張のふよ
飯糰まら日流草記有り
時多き寛政乙卯の夏朝の
所や免の風よ吹ちるら
そりぐり

あふの

素襖

三三三

詩本集

Handwritten text in cursive script, likely a poem or a note, written vertically.

此七初四上六

山みきり
 子中々木を様をりふせむ忍家
 なとこハ草子山なりきす
 我君の意力を沸き名不詳く
 墨煉るると所家を拾ちん
 豆出り月と思ハハ杖をさ
 一木並ひ所家をさるり物し
 門建て牛の尾田く水の柱と
 夏の障日冬、京へつて来る
 沓作る宵の念何小目を閉て
 同ノ藪よ年一をくむ人

素驥
 士朗
 驥
 朗
 驥
 朗
 驥
 朗
 驥
 朗

偏てめふやうなき鳩の姿
萩もすくきも月ハ小らうき
摺子の心づの秋小く根の枯て
陣所つく板を挽く己のる
ひくくと簾揚をる朝日影
眉をみゆくり小おほはに初花
穴一糸砂かきちらは喜の草
逐きておそやうと扇るしる
そつとくく和を山家すくし
秋明くよよと習ふふこ
時を来らるるを小袖みたこ

磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗

批七次四十九

醫田の舟の稽りりよ初
這ふ響のあな面かき人々や
手よも取まぬを覚て
物の美よらの嵐吹くり
あまはあま三日月の影
端もあまも持し柳ハ葉をけり
杖の流矢下総よ入る
大風の扇くくは響く磔の偶
秋の鏡のあまもくくもく
初もあまもくき沙汰のあまも
摘やはますや若菜のあまも

磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗 磔 朗

編張小耐く花の重なり付
眼を志ほる喜栴の糸
岩小せく水のやうある恋を
膝のあがり小玉はほほ
子さき等あそぶるを曳ぬん
杉もしるきまをまを前
風呂あみかふの風雅をえちし
去後の寂蓮月のお忠
出る齒を秋の石砂となるや
柿動りん終じりのを
夕雲の星崎の塩焚ゆ

青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗

枕七初四上廿一

尾をさけく笠青の場
芒ちる裏小疎買ふ便し
花とつ枇杷をくまてきり
今朝くく小玉を遊れ人そと
尾小交りて越え川端
むら雲は北斗影をかくは
ぬるき都の賦を書て居る
雲小十日あまりの高かりて
このほしうある花のあらし

青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗

修屋のやうと

月洩り水鷄啼秋の膳のこ
海よりあはれはくく暮山
あうくと一押は紅のを笑下
小麦の葉をかつくむらぬ
幸あふぬ人の顔子を見ては
水、這出る庭の遠り木
ちつはけな猿も哀まを鳴やん
まをくと又まのつと朝のよも火
ありくと夏の襖を押やうり

素葉 岱青 羅城 士朗 岳輅 紀鳳 白岡 素葉 岱青

批七於四上世

雲ををるるも冬は物りハ
秋の秋紅葉の藤系乃細く
みうんを喰へはひとり小をま
月の森の客の人と泣きたり
もくうくとと縁をくくら浪
君もあはれぬ峰の輝りの身をそ
加茂の社又多きうくと悲は
四五尺の初花梅咲ふりり
土版の山をわふる 詔 賣
まをを悟む人よそろくはいてり
連ふの料は後るの業 船

岳輅 士朗 素外 物裁 白岡 紀鳳 羅城 素外 物裁 方明 少如

四方山ハ書ハ氣色の定リテ
 延至
 おやろくあり〜園を尋る
 布泉
 中葉の白ひふ向ふおもすろく
 素葉
 小葉の風のひろく〜
 昆明
 時〜てハ水の香さ〜
 騏六
 洞小うらる 厨 佛の 良
 徐英
 娘亥のきのふの輿を下さぬ
 岳輅
 踏上の泥も〜あ 木林の花
 五絡
 と〜く 花月見の招は鳴り鳥
 羅城
 霧よ〜人の 志 神る 木
 土朗
 世よ〜村も吹く〜 林の風
 信雅近

七
 七
 上
 三

辰巳始やうりさく〜免由ら
 同 甚門
 塔二勺ハワリ友雅近ハ伊勢
 懐〜の 懐 芥園は持あるを
 ついて〜ろく〜ハ〜の 驛白
 山涼き伊勢の依家小文をやり
 霍洲
 不守〜て〜る 臺の 小 夷
 紀鳳
 ち〜かる花ふ〜りと日の〜
 白図
 舟の帆を〜切り 出は〜
 騏六

のきはたつらむきのいさむ 松を評す
 橋を走し女と素衣にうけり多岐
 ねとるあつゆをわゆるの魂 柳
 うすし晴ち雲をくの月代り
 久米迄のほしとと陣もまむ
 風ぬけの洲をう人の髪をう
 花りの礼を戴きう 江
 藪語を花の半波と成りたり
 葉をとおの志川く姐の 露
 八守お殿十の湯壺まうれは
 山はくまきわあやまもる

此七勢四廿五

一うは鶴あひらと急くなり
 おき音のすうこいさきと深の 神
 椎庵を何をやまぬくおあな
 田わりの富をまきく神 家
 移すけをまき網ひらる新米り
 らすりけくまら 碑ヶ井のあ
 れまふあやみぬ湯をまき尾
 契うの移山と終子ゆあ 寺
 月うけの蒼子新る 朝初け
 念佛をまき揚子ほむ山をう
 のさくと橋を橋をまき遠る鏡

松尾 川 朗 青 明 川 朗 青 英 明 川 朗 青 徐英

小雀の汗をとり 新く梅の香
全

春月
もるの月あらしのし出たり
羅城

むつききき春のつらきよよ喜の
益青

もつらききき春のつらきよよ喜の
全

喜風
全

怪り人おもぬくよまもの風
大阜

雪白のつらき喜風も吹たり
青川

渾くはくくよかりぬ喜の風
全

花
全

ゆらゆら又なきふの程路
士朗

批七約四上廿七

着よりもぬくよまものつらき
少女

ちるる能いみ子西りの泪りか
全

押
全

氣晴しくい喜のちりし柳
天老

ゆらゆらよきし柳を吹ふ柳
桂五

月よゆへ喜き柳を吹ふ柳
全

美あまよふ喜きし柳を吹ふ柳
全

美あまよふ喜きし柳を吹ふ柳
青川

美あまよふ喜きし柳を吹ふ柳
益青

あうとゆよ喜きし柳を吹ふ柳
全

帰馬
全

河を渡りて西にゆくを帰馬

青川

夕月をみるくしををさへりて

竹有

あたらしく宿をたぐる秋はあつりき

全

雛子

世をゆけいふくらむく時雛子の歌

岳路

をれはちるふれはよりきしりの歌

大阜

杉低きゆりきしりの歌明か

全

もろも

もろも余情はゆるゆりか

方明

もろもあはれはよきしぬ心は

羅城

もろもや傘ゆりもろものよ

全

批七約四五世八

蛙

縁の帯と寄道ハつ出に蛙うか

青川

湖へかよ返りけりてなくありの

岳路

魚こくし蛙のふえりて

全

菜花

菴の菜花や二日摘むは花は咲

桂五

そ持ち寄の花はふりておのく

一与井は余ひ舞をき

菜の花はよく先くすらの標ころも

士朗

のくしひたれしも親はくめは山を

けしきもあつるはる雀をきよ

あらしをく

芝草の花は世間海と啼——雀

全

あらしをく

春の夜や同一室よるも 緑葉

青川

春の夜やあけをさしき月夜

松兄

春の夜をさしき月夜

全

あらしをく

あけのふの中を引さる 芝うか

竹有

あけのふの中を引さる 牛の尻

白圖

あけのふの中を引さる 免くれり

全

あらしをく

批七款四上九

あらしをく 水のと急ぐ大徳 寺

椿堂

あらしをく や田あしも急ふをきて

方朋

あらしをく のすそをて田あし

少汝

あらしをく

あらしの一瀬ハ水のあらし

体青

あらしの山は山をぬ 朝月夜

徐英

あらしをく を離さく 松のあらし

全

あらしをく

あらしをく みるふをて 橋のあらし

松兄

あらしをく みるふをて 橋のあらし

士朗

あらしをく みるふをて 橋のあらし

全

己未

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

批七級四上三十

菴大集卷之六

歌仙行

枯くやせか小出向ふ菴子大
加那やくそくの書ふりふり
火桶張人の様姿を足て居りて
夕くらまきくまなうら福白
橋の足のわりの三日の月
常那朽ちるうほまのくう
湖の水を一掬とりよるま
垣の際まきくむむ持く出れ
世の中をまきまよる今朝の虫

士朗
野雀
大蕪
五道
左雀
石老
湖風
士朗
野雀

己未

鴉ハ秋の鳥てこそ、何
 小言いふやうにふきこむる賜の鳥
 若き妻ぬまのまきぬ山畑ハな
 襟巻の聲を月夜小逢ふあり
 たちやうらうらとて、視ふ鳥
 河をうつとも、流るる古袋
 砂川まゝふさ敷の、細うら
 横尔見る花ハいつもの流るる
 時増の鮮のふきこむる妻、
 みくく、やたもよ、後夜ハなをく
 土まぐ、みちふ、新下の、鳥よ

大蘇
 五道
 左雀
 士朗
 湖風
 石老
 野雀
 大蘇
 五道
 左雀
 士朗

批七款四上廿一

鳥をひてし、妻き、湖波山
 鳥深の丹鳥、ハ、流るる、やむ
 人毎尔、深の、筆を、持たなり
 何を、あふ、ふ、志、ほ、ま、し、身、そ
 酒く、さ、兒、鳥、帽子、細を、み、ぞ、て
 ち、らん、西、く、ゆ、ふ、を、こ、る、ま、の、ま、の
 ち、ら、く、と、鳥、の、啼、る、波、の、上
 阿、ら、ふ、恋、す、ふ、云、井、に、伝
 月、赤、き、軍、中、に、た、つ、あ、ま、の、ま、の
 根、深、の、味、の、出、ま、る、秋、の、野
 野、雀、の、宿、る、ま、の、ま、の、ま、の、ま、の

湖風
 石老
 野雀
 大蘇
 五道
 左雀
 士朗

板戸のこゝろふ家のをくし紀
野はくぬ人くこせふ志しこり
まりく鬼の直す葉香
兼り葉をくしるやこり鳴る
たほは不明る二十八百

五道
左雀
石元
湖風
大蘇

批七款四番二

菴犬集卷之三

百韻

相言一芒尔時角をさるるも
小庭をさるるの影をさるるも
蛭のふるふひより起るる暇も
漁り事こもるる影の差をさるるも
腰くげふをさるる山をさるるも
真葛の志をさるる身をさるるも
鯉をさるる二日の月の影を
角力の清阿法静るるりく定
ららるるくと和漕よほる羅波瀾

野雀
松元
魚堂
岳輅
士朗
蘭屋
桂五
梅間
羅城

あうらう香の元る年一財すぎ
椀の末のおもたきらうり苔むて
鳥をにくむ寺の飯食糞
碁歩めと双六うらと二人ふ人
あうらうとと香やまうけすら
魚乃つく半川魚くも水うまて
大うけの蕪小椀雨の香原
月うらよと海うらうと山の上
うらうらうとて長うをまうま守
とやくとと椀ら椀のふ窓の香
うらうらう椀のきらゆの椀り香

葛井
嵐堂
天老
少汝
大阜
方明
野雀
松兄
魚坐
岳輅
士朗

批七終四上卅三

村あうらう香の元る年一財すぎ
椀の末のおもたきらうり苔むて
鳥をにくむ寺の飯食糞
碁歩めと双六うらと二人ふ人
あうらうとと香やまうけすら
魚乃つく半川魚くも水うまて
大うけの蕪小椀雨の香原
月うらよと海うらうと山の上
うらうらうとて長うをまうま守
とやくとと椀ら椀のふ窓の香
うらうらう椀のきらゆの椀り香

葛井
嵐堂
天老
少汝
大阜
方明
五雄

箕手尔家の兼ふむろ戸
種會を函のふふたと兼ふりり
こよなきいろう小月うちらつく
小社こらむむほひも秋はらるる
櫻をく蒔て鴛鴦をこ
芦う巻いて萩もほほあはれ
一時はくを門たぐりて
土山さききのふはんたるものね
阪輿の尻のらつき松明
ふらふらきんかたて竹をゆき
兼ふのちのの急を舟で出れ

左雀
五道
大蕪
石老
湖風
霜居
竹有
士朗
東水
左雀
五雄

批七終四上四

み雲かきせはあつも字紙の羞の物
花を名辰の申のあやそ
芥々あつををくむ糸をゆき
丸う吹くむ葉の素う勢
清まみてもんく賓頭盧の耳のた
あふく云井極ふりて
是の月の兼ふを吹もを
庭のこの秋を兼ふはあろ
あつくくやう橋うら人の田みりて
鷺もやさき橋井の雲
胡桃焼て福をこの秋海ふら

大蕪
五道
湖風
石老
竹有
霜居
東水
士朗
桂五
岳輪
魚堂

あはれの人をつむ ー ー ー ー ー
山菜花うさげハ子あゝ葉はえ賣
葱をやうとふけーる 平子 島
あををんをくきふうくく 猫の妻
た〜このまハ〜か 朝日 母 子
車崎のねのあ〜りのまふすめハ
ふねの中〜り 春 ー ー ー ー
一 一 一 一 一 嵐八月 桂 乃 白 乃
霧 ー ー ー ー ー 島 井
義 ー ー ー ー ー 方 明
駕 ー ー ー ー ー 大 阜

蘭 佳
野 雀
天 老
羅 城
梅 間
石 老
松 兄
霜 居
島 井
方 明
大 阜

批七款四上世五

うすともり 樂 題 司 の 堂 の 妻
石ふくハ 琴 ー ー ー ー ー 左 雀
手 ー ー ー ー ー ー 少 女
横 邊 ー ー ー ー ー 井 朗
物 ー ー ー ー ー ー 五 雄
風 乃 ー ー ー ー ー 大 蘇
焼 餅 乃 佛 の やう ー ー ー ー 東 水
妻 ー ー ー ー ー 湖 風
小 路 ー ー ー ー ー 五 道
ま ー ー ー ー ー 竹 有
横 ー ー ー ー ー 岳 輅

左 雀
少 女
井 朗
五 雄
大 蘇
東 水
湖 風
五 道
竹 有
岳 輅

遠征すて林宮宿の妻の春
 椿堂
 月歌尔冬の梢をけり
 大阜
 法師のまゝに維多の
 桂五
 係元のむらゝ落たつ壁力元
 松兄
 幼くはき度ふ大葵ひす
 少汝
 五月あもぬして甲斐をす桂堂
 椿堂
 百合尔よとくを雲那う
 羅城
 目尔はつら程ふ小鳥のむきなり
 桂五
 浪うらぬ星詠のふゆ
 蘭生
 ちよやくと塩焼電をゆえ
 士朗
 親南り子ありものよまよき
 全

概七勢四上世六

馬士尔むらゝ一枚をきて
 葉生
 柳戸をひらく水仙の月
 魚堂
 日歌ふら布留ぬ宮右の本指
 梅間
 りのわをきさすふ台川の音
 士朗
 法師の筆尔季白の 名を去て
 天老
 山葵小むをる之文の あり
 松兄
 鬼居出ら蝶の鳴も止る
 魚堂
 五つありて水を月の末
 天老
 采古鳥の身羽のあたりふらた
 羅城
 遊女は舞言はくそく
 方明
 はつらと起るのりたのありさ
 大阜

从中の塵ふ文々、 蒲 少 英
くふあう尔を山橋草の菴
瓢を扱く来ぬ人もを
岳輅
少汝
樸間

(Faint bleed-through text from the reverse side)

枕七效四上世七

菴犬集卷之三

春

我朝ハるく橋の本路写外 士 朗
やうきくさくさきり子と扱ひり 魚 堂
人の来くくがふもよりの菴の玉 羅 城
橋人尔おとろくさきを花アん外 卓 池
よき山ありきり 少 汝
忍浪くりと糸をけむ橋外 大 阜
菴をくまのうはつが道の山路外 野 雀
山ありら面ふまきりとあふりり 五 道

花の山を高く登りて見けり
 ちるハ風をすハよ人こころ
 花をくハ布と風小るは成
 花下飲
 大堰川を流る花を多る
 花の上ハ花あり月の影
 花をてこそよ花は月影
 花をくく松の影
 花をやく
 宇洋

花七歌四上廿八

花の山を高く登りて見けり
 ちるハ風をすハよ人こころ
 花をくハ布と風小るは成
 花下飲
 大堰川を流る花を多る
 花の上ハ花あり月の影
 花をてこそよ花は月影
 花をくく松の影
 花をやく
 宇洋

砂文
 蒼蚶
 千當
 世牛
 系厓
 木容
 雨来
 壽松
 巨樹

七月六日の夕ぐれに松村と
 いふをよまうぬ移の生垣に
 かりたるまゝふこのもき菴
 ありてやうく暮るをうち出さり
 世つとておふふうらん月と梅
 大仏のぬをふり暮るをうか
 うくひすの起る来小巻苔の上
 嵩やよき梅ハありくはれと
 五喬

批七初四上三十九

嵩の小巻もさうぬをうねうか
 うくひすの中の時来や来山
 梅の香さるよ
 風のくきもはるる
 吹かす
 嵩の折戸小巻のふりふり
 うくひすやうくはるる
 母の巻子先降るるの小巻引
 喜あや木の百小巻ゆめ海の巻
 子家内の小巻もき妻のあ
 らぬあの前もさるる流るる
 大蘇
 五来
 由登
 雲帯
 天志
 乙二
 石老
 可考

春の日の日多きありかろく春の月
 片里やまねの月さほ葉庇
 たるの月明り春のわたりし
 さむくさハキく春風のさまうさ
 花さる水いくやまの風
 春風や春の終先ハ隅田川
 糸の津堂やまきひるりぬ
 辻佛の心作はハ花のまき
 小りかろくあましく月のさし出るか
 こころ木のつくろぬ方のむね教を
 夏ふりついでふるかを化命

兔川
 目紫
 方明
 桂五
 文左
 湖風

批七放四上十

たもふまの世書を録る
 春風のこねやむくの春の風
 伊勢浦や波の中よまの春の山
 石の浦人ふ春のてなりの路の
 陽笑ふ木やまきく小舟の
 子菰や松ハまきのふのあり降
 庭場や襟より外ニゆもまぬ
 鳴牛の春をまきく終言

岳輅
 春蟻
 佳長
 圃曉
 石老
 野雀
 尺艾
 大蘇

山里や木海をくくもきき春の言
 五雄
 子一鳴やふか笑の徑ハ言う後
 栗大
 子共舞をとりはきてて何や
 又文
 親舞もなして維子唱やうり
 霜居
 後即ちうはなして維子唱麓川
 秋國
 蚤のふきうちの幸あり猫の悲
 希言
 夢想
 松風心なきくく記反よるまの麓
 野雀
 かく書て人小あまなむは

批七於四上聖

もとより人の言くは
 九峯
 其の言る車向くは
 魯隱
 けきをとりはなすは
 左雀
 ちよまの氣を成は
 魯堂
 ちよ言をとりは
 黄山
 其柳小胡麻の癖は
 雄洲
 以つ美てり柳ありは
 周瑞
 大空のまよ小まきまぬ柳うか
 芳之

行人のつとむる夏の柳 くらよ
物先まきし ことごとく 坪原の妻
月うとくみそく 柳の木のるが
之日月のあとも白く 柳の玉
山里の人をよき 柳の花
人のまらるると 柳さく 柳の
白柳の七柳さく 月夜に
柳をくぬ人まき 柳の玉

松兄
椿堂
雅巳
野雀
嵐堂
葛井
許凡
大蘇
梅間
少汝

批七次四上聖二

菴犬集卷之四

月八夜に 柳の玉あり 柳の玉
葛井や 柳の玉あり 柳の玉
瀧を越へ 柳の玉あり 柳の玉
布衣の上 柳の玉あり 柳の玉
不也 柳の玉あり 柳の玉あり
月八夜に 柳の玉あり 柳の玉あり
信濃の 柳の玉あり 柳の玉あり
二突と名つとく 柳の玉あり 柳の玉あり

大蘇
梅間
少汝
松兄
椿堂
雅巳
野雀
嵐堂
葛井
許凡
大蘇
梅間
少汝

色あはれとてさうとら小門

けり小書つく

冥古を誰そと可へはととさ

はとさけ初濃の種ハ人しつく

おけいさしとら砂ふとと先を部

象星の津よ仙よととと

年の公ハ折つくをたふぬ

諒人の望見とて写り初とよ

杜鰲志りてとととの世界

鶴の解夢出以竹の雁

ひり事とてととハ又田く鶴

羅城

左雀

吐牛

魚堂

加津

文松

大阜

壺伯

莫二

枕七於四上里

寺のまりのあつ鶴はく

傘のちと出さりの夜の朝

り是れ人の夢あり夏の将

たさくは月小短き夜あり

あつ風とてとととと

松久はを掃りて風

月も日もすきと松の林外

草木とてととと

月もとありて原

原とてと松と出とて

五子松川

李閣

卓地

里祐

窓巴

太蘇

葛井

梅間

蕉雨

中

喜年
 素榮
 全
 文兆
 楚雀亭
 兔角名
 笑
 う
 と
 閑
 雙

喜年
 素榮
 全
 文兆
 楚雀亭
 五道
 五明
 士朗
 閑雙

批七幼回南五

庵
 初月
 之日
 月
 喜
 月
 さ
 心
 心

大草
 吐文
 岷山
 楚雀
 全
 石上
 桂五
 椿堂
 蛙聞

湖底
 仙市
 石老
 斗入
 五道
 巨鶴
 六車
 李臺
 蝸園
 大阜
 此七初四上中六

十六車

蛙園亭
 士朗
 大蘇
 魚堂
 草堂
 八峯
 方明
 羅城
 一之
 素檠

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 加津

松葉正秋葉う顔響 五雄

あささけらふ山のちみり秋の風 燕武

あき風や伊ふつ々も山鳥 八峯

本免の耳ふはらるるや秋の風 魚堂

秋葉のきさけいそや秋風のよぬの松 大蕪

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 蕉雨

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 士明

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 大蕪

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 蕉雨

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 蕉雨

批七歌四上四七

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 斗睡

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 大魯

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 騏道

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 其静

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 草竜

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 大蘇

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 應汀

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 大蘇

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 少汝

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 五道

秋のきさけいそや秋風のよぬの松 五道

あのをろの面や月中も砧ふも
松をふんくまき長たきハタキの秋
細林やまきまて沸き蟻の道
和より居ハ仏も持壽を細の林
天の川紀の涼よきふぐり
そりや何やヤトを
ぬきも又面おー松の落
東をふりの障ふぶ引鳴子
ときあけの葉の本み種る暗
松風ふあろ能たる袖味る汁
毛くある芙蓉の毛の夕う南

阿彦
桂五
松兄
柳莊
士朗
石老
文淵
卓池
左雀
来山
升女

批七終四上四六

朝うを月とふさう暮序折戸
研う井をるる付命靴
くりくくるより落たりあハ
いりふやさるの人やと馬士ふ
あくくまき
研う井の草ふ花あむ鶴う南
五葉ふ松のふふも秋の草
秋の草み面て残漢の埃うか
あくくまきや美きくハあぬ雲家
葉の美や比すま捨る百子の売

道彦
東水
帯樫
宇曲
蘭厓
岳輅

林田家

秋の目も蠅と繩をみ膝のうへ

榎間

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

庵犬集卷之六

冬
くも麻阿らるる書 掃るる書
お出し 漢ふより 秘きしもの
いしる 書も 秘きよ 人の 門
秘書や 人の うを たらひの 本は
はつ書や 陽山の 寺は 秘きよ
くもハ 秘きし 書よ 風う 書ふ
今の 目も 竹の 書ゆき の 書よ
かくして 阿らる 河は 又 秘き
書 秘きし 書を 秘きし 書

岳 輅
方 明
士 朗
米 彦
大 蘇
蛙 聞
野 雀

批七於四十九

山里やあつすりうら 月や雪を
 雪山を同じくふ雪の横日うか
 秋の明けはるるあり雪の松
 世の中を雪ふやまをて月や雪
 子代う雪ふて
 うねつ接しきう雪ふ雪の山
 對伊吹山
 一帯のふさりの雪の峰
 ふる雪ふつとと雪ふ花うか
 雪の雪を雪ふて雪うう雪をとる
 つる雪祖父は戸あり初雪うま
 全
 幾兔
 六車
 左雀
 李堂
 湖風
 杜影
 成美
 竹有

批七歌四上平

雪の雪や南月ふふ雪うま
 岐岨道中
 雪く雪うは月雪うれてはるるう雪
 幻住庵あう
 雪く雪うや之井寺の待瀬田の橋
 雪ふ雪ふ土たう雪の因雪う介
 雪うこうか月の山うり雪う免
 雪のふより雪ふふより雪の雪
 雪布や七日雪うる雪う雪の雪
 不破関あう
 五道
 崔雨
 野雀
 硯静
 少女
 桐栖
 汝榮
 羅城

木々々々々々竹不茂心雀うか
 風のうこうくく由く藁を食うか
 木々々々々の雲の二子や云の月
 木々々々々の藪不百舌鳥なく者か
 一を控せハ葉も亦安し
 木々々々々々四方不雨極うか
 月々々々々竹の林不鳴くふ鳥
 音々々々々浪を何くはよ鳴らと事
 夜泊
 木々々々々々所くは不鳴く子鳥
 山々々々々々人ふも何れは城の鴨
 五道
 里桐
 了國
 雨節
 大阜
 左雀
 天老
 木容
 雨曉

批七於四上五士

水々々々々河うりても鳩は海
 木々々々々々鳥鳴り小鳥うか
 月々々々々々鴨の鳥々々々々々
 木々々々々々と風も松竹のうか
 木々々々々々々々々々尾雲の枯神の
 引々々々湖をきき草の枯葉外
 木々々々々々人の子々々居る柳外
 木容舎
 木々々々々々々々々々友々々々々
 傾城ハ泣り々々々々々々々々
 人の子のふ々ハと々々々々々々々々
 五道
 梁臺
 有磯
 中々
 李閣
 樗堂
 竹卧
 士朗
 岷屋
 巨峰

亮亮の男をりやりにそら鼓き
冬月やなもまたる門 板
冬月やかくてしつ返をとのう
稲ふしのそらぬ冬の月影外
冬の旅のまうらむや綱代也
折るつし 梁おももろき楳岩
炭竈や炭をくらたれをわう
ほうちもの杖をほぐり冬籠
陰出のをしむやうし冬の面
冬もまむうらうのふぶ
兄やるき旅人きうしとまへへ

桐田
岷山
東水
魚坐
意逸
梵阿
巢兆
長齊
玉洋
兆如

和七歌四十五

しし 秋の山をいそぐ 葉を
しし 冬の時をわく 葉を
おややおくらしき

神尔つく松葉のまの松の
いすも 松葉のまの松の
大根引はくとく 嵐の思り
冬十日はいふし 鞠の中
散歩
大の子の藪をよそとらつ小玉水
松風を雉のまをうし 山あり
海見んとあふ日のわら師を

松兄
松兄
素亮
系水
梅間
玉屑
可笑

松鷲の鳴き師をの市の中

矢野

り多のあそりともをぬ山あひ

士朗

多をむむ方一日の磨り分

山泉

煤拂を世話して鳴り鳥うか

蘭屋

大蘇の海の子

野雀

享和三夷年

五道同輯

大蘇

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

批七次四十五三改



藁つゝ集

自序

代かく小田持けりあを利
子苗とち日乃あのおとま
田のそよくあーをこそ乃
香のさるくと執する歌の
里かききまなをそあを
あーも多くこの年序を
一事ははたひらうつ十年
道くなりそな生涯のうら
あーあううううううう

Faint vertical text on the left margin.

作りたしはむきを色紙に
ひをの珠とあつらんよとをり
可利

後田舎

文化七庚午仲秋 弦六

物とつらふ〜
田のつらふ〜
ひのつらふ〜
たか〜

自作

書一ノ集

批七於四下

歌仙行
才の春の種るはをや〜
葉の春の種るはをや〜
新の春の種るはをや〜
とりの春の種るはをや〜
菴の春の種るはをや〜
多の春の種るはをや〜
杉風の種るはをや〜
い川の種るはをや〜
山寺の種るはをや〜

白濁

駒六

士朗

下

六

朗

下

六

朗

ぬりあうれハ胡麻の花あは
 枝ほるちを折りく、舞われ
 是ふむむやよの意をすさ
 ハ月ハ月をききてもほめ
 峰のよきあはく、形のい
 きるもく、寸尾のあひ
 ありむすふさか、あは
 玉一結、あはく、一結
 舞のやうなを、氣をり
 湿盤會の種つく、人
 舞のあうれを、居風呂へ

朗 六 岳格 朗 六 格 朗 六 格 朗 六 格

批七歌四下二
 舞七歌四下三

甲十二の年、よ吉世を
 山やく、起守報り、
 筍ハ垣の外より先へ
 ちちち、漆を、
 世の中、あはく、
 かう、あはく、
 いつ、あはく、
 三笠の雲へ、麻吹、
 ぶく、あはく、
 梅うき、あはく、

朗 六 格 朗 六 格 朗 六 格 朗 六 格

六 鹿のねくは序おく戸りて
 朗 文著の興の中も唱かき付
 六 仲の年夢をもちりも妙存
 朗 びらうるあま花の根おふ祖文の海
 朗 海もくく守もねよやうくる
 朗 白圖 四の騏六十二
 朗 士朗 土岳輜八
 朗 鹿野

枕七放四下三

鹿野 鹿のねくは序おく戸りて
 鹿野 文著の興の中も唱かき付
 鹿野 仲の年夢をもちりも妙存
 鹿野 びらうるあま花の根おふ祖文の海
 鹿野 海もくく守もねよやうくる
 鹿野 白圖 四の騏六十二
 鹿野 士朗 土岳輜八
 鹿野 鹿野

風冬之部

曉臺 空を穿ちやうく曉の峯の杉
 鹿野 比る化るるもよあふて仰
 鹿野 かのあまもやうく毛衣の襟の白くそ
 鹿野 ちをわくものとき出やまの旗六
 鹿野 出来たりともよ
 鹿野 びらうるあま花の根おふ祖文の海
 鹿野 海もくく守もねよやうくる
 鹿野 白圖 四の騏六十二
 鹿野 士朗 土岳輜八
 鹿野 鹿野

枯尾花多臆のまろしき
かき芦を茶よ焚雪の日暮
神君の小笠よ多むハ吹まろし
松多や多おれ山の落多夜
菱多よよまろし雪雪のま
おまのまよまろし多落まかき
風やかろしくの竹火を
一日魚店よ多まろし蕉翁塩綱の
吟をおもひて
本かろしや茶のまよ色む鴨の脚
風の吹たろしり隅田川

騏六 槎雀 大蕪 騏上 苔明 吐山 黄山 騏六 雀人

批七於四下四

ころろしや佛を包む山のう
多神のゆまろしりれろか
まろしろしや人の影のり佛の中
しきまろしよまろし日和ろ南
茶の花や一膳多き岩戸の烟
茶多花よ多羅多氷のやれろ
是多の朝あけも多し雪のよ
店のおひろき中人も多
天地のよまろしものれぬ店のま
雪多より声多し多のまろし
青鷲多しや時多の先けり

檜良 斗石 葛井 駈六 梅間 駈六 木天 竹有 桂五 盧川 士朗

石の意うこころちその里あるを
的場を於くよさけり
曙の毛櫛やうをるらん
あうつうく流れこころ
語こひま留まると暮くるも
面のを句を傘なり
面白う伊勢の料理を取継ぐ
ふ縁のけさのまをぬ山
むら雀そのうき聲を鳴らう
そねをよむてよその河はする
名月よみおくらう其處所

卧央
五雄
竹有
方明
大阜
六
朗
央
雄
六有
照明

批七於四下六

あぢきあぢき油の角力有
きりの民をそくはらひ送り
人のくれくる花の末をほり
紫のさをききききを善し
雛の若衆はぬる春の風
おすうこの声の別はけり
涙は清ら世の旅さ
ら世井の舟の轆をさ
琴のひとをよみその
あてとけ浪の花表のま
海あやしをる苔のま

阜
六
朗
央
有
有
央
朗
岳
有
央
六
有

け角ふとり急よつてあるくなり
 そのを答よする人よまきこつ
 星まこる朝ハ喜らけき松の風
 さふまもせぬ遊つたの月
 甕つきてふこをいよとち口くよ
 候つきの程うそある志くまきく
 八重之津を流よあうる猫の鈴
 雲のほそをまよつたの山
 帰す井の水を一抄祝をうそ
 むりしあつたよ其の山
 咲花の葉をその空を流きたり

洛 阜 六 朗 央 格 有 六 朗 央 格

批七初四下七一

此路をちうふ鳳ゆりまねてり
 駿六 七 士朗 六 央 六
 五雄 二 竹有 六 方明 二
 大阜 三 岳輅 四
 大 林 之 郎
 西の月歩りて見れはも痛は

有 明 央 格 有 六 朗 央 格 有 六 朗 央 格 有 六 朗 央 格

きくの花を舞たるぬ神の瀧らほき
之れ一時秋のわらハ麻の唱死ん
横雲の杉山ゆら麻のこ 名
そのふやるとハ何を唱小麻
風さらくハ書をたらく山の麻の秀
破うてハ嵐のわら 振 々南
人さうとさきき事やうふの月
秋とハいつ秋とやうふの月
花すきき秋をハ月の吹あう南
秋すきき麻の朝夕ハうらうら
蜻蛉のきくハ麻の喜たう

麥阿 秋丸 墨山 硯静 駿六 五雄 帯梅 駿六 竹趣 士朗 梅洲

地七の四下八

きくの花を舞たるぬ神の瀧らほき
志の葉の美は獨よハ海ありたり
葦のふらふらハ風の吹あう南
朝の朝よかきるもそのの煙
朝雲の浮よつげも焚火の
秋の秋人よもつら風すき
雪の喜れよと縁ハ梅のこる
勢州菩提山萱堂二夜三日参籠之時
さし向ふ併れハ秋の
秋の葉ハそきくそねハ月夜
名月や此はもきする休の

葛齋 野秀 鹿野 駿上 彭翔 烏丸 徐英 馱六 卓老 岳輅

明月の如くうつらうつらと見ゆる

桂五

病後

そあつちを月子とりつて歩みけ

駢六

上福よ修せられし郊外に

現六

月を足て夜はあつちをえうら

無六

をうらあり

無六

月丸くあつち清後んせよ丁の意

射道

美う代おち砂の松よふの月

射道

秋の夜は只新の燈よあやま

由肆

秋の葉の足事あつち窓の月

卧央

月の出を望みし庭うすくきけ

坻屋

枕七次四下九

九月を日行せ給ふ中より

閑六

新風のうらありし日の暮る時

也六

月定陰より宿る湖の月うら

あ六

はすく雞夫人語の響を聴けり

娘六

自塵を出たるあつち地せうら

士願

湖を枕小志より作生し鳴

駢六

いな妻あつち果を落来るひえの雲

兆雲

目をこゝろす時稲妻の雲杉に

駢六

あつち秋も月松をよそ詠はる

素剛

あつち蘇山よ登る事二十一年其又

娘六

今逢ぬ月の末三岳の像を

娘六

終りなりて

み十と世の枯や竹のつ方をちき

駿六

あふくも切あう三岳の月

大阜

石波も蒼海系又風路も

五雄

夏之部

走ぬれはちちうきもすも衣

桂五

くふくも父のとのきん更衣

士朗

おなくくい子小懐りりももく

駿六

雲と見し花の枯枝を故きり

而后

陳轍名のこも故登釣る家も

少汝

手此とくく所もて来ていり

尼閑樹

此七の四下十

桂るをけり松のこも夕すくみ

浦且

夕泉やかろりありたる油橋

九岳

夕うのたのあり此料理

駿六

時鳥一椀の茶を投や

大阜

をきき守写ぬらもり

木容

月古は心て廻りもり

駿六

やもきけ吳越のまもり

竹有

吹さうのそ性さう

岳格

まともる是のなもさよけ

田江

牡丹咲き俄は

松呂

山掃くこや

鹿野

さうそふかびと十日さかり苔の花
夜の日のをるをよこぬ月夜
夏の月田のぬくこよ明よりり
夏の月出るもいさも林藤うさ
山よ藤て起きたるもさき嵐
水鶏鳴の泣をよひさす細江引
鳥鶉鳴のゆふふ京天ぬう菱松葉
夕多や湖の水引かこさ
夕まの果おもしろや水のう
葉やを朝のたをけり春をさるぬ
隣りう灯うつる若葉さうか

駿六 米汁 五雄 棋簡 松菊 駿六 昆明 也人 萬中 駿上

批七約四下十一

暁のぬきさつてをいさ夜寺
暁のぬきのす栢よとまりけり
春之部
梅の花たよりさよの場くれ
山雲、せをさよこのも梅の葉も
夕橋蛙とくへて鳴をさるり
きのふえり梅はをの木のるる
八重藤忘れぬる宿もゆら
花毎よとほもゆらり八重橋
暮風の休は影さす雀さる
さよとれさるをさる雀引

東雨 駿六 岳路 駿六 大阜 黄山 圃曉 梅間 徐英 金谷

うらうらと出てり丁よ阿比よ危
花はかゝるものごとく出る山の家は
花をよんよ来る人もんる山の家は
大層もかういふさうも花のさくれ
静とを世を志る梅の花の喜
もめりすまきとて面白がるの風
喜の風祠つり喜る境うんか
喜の風や青うれ出るう田螺か
やふいふ家もするよ喜の風
よよよの白むつうや喜の風
きとあんよまき人のあや勝り月

永齊
少汝
駈六
方明
駈六
竹有
茂竜
茂東
月底
李臺
五道

枕七の四下十二

教寺や海土のよとる涅槃像
山寺や入佛供まの帰る丁
茶嵐ハ杉のまきよ鳴りしす
鈴うのりあきも出たり種あ
入唐讚
初様つんくハ法もくぬき式
何某新婚の賀よ
喜の目れつり念もよ一喜と外
喜の白くや教又るぬのおと
喜小二日あり喜ハ日あきと

士朗
南巢
沙鷗
有磯
駈六
竹堂
大商

荒海や大うしと赤き春の魚
桂五
り春を踏波の草子足付より
彫蕪

諸國四季部

梅葉や春くふへる磐石の穴
毛椿堂

空き日のあはれをさげ春の梅
駒六

えんくさき旅の姿や春の面
卓池

二月降る春中毎のあはれ春
駒六

二月やうはくをわく人の恋
大津 駒道

色のおもふ春を二月の嵐は
駒六

芽ひらつたや因標の蓋を船の春
兵衛 一州

梅柳春の圓鼻とらんちをり
筆 果居

一枕七夜下十三

梅柳の春くふへる春の
駒六

花のそぬ子似をり春の
京 其成

うしろのうらまは半の
駒六

あすはわさぎの春を吹くを
雀 雀鳴

三月月子序相りや春の
駒六

春の花のそぬくもつんを
大坂 長齊

花の水子私春を春の
駒六

月のあて目を焼捨の春
坂本 于當

よくんれは月やと替る色の
駒六

春の春は遠れかや春の川
近江 龍山

七夕の春は稲妻はなうら
駒六

彦彦を住よかりりり暮の月
大坂 岩苔 駿六
 夜の月もなき心あそよけれ
大坂 米彦 駿六
 ちものつらも其は惜まき守志の歌
 月よ嘆をあるなくは杉のふけ
江戸 三島彦 駿六
 ちやくくと極をり去りり田一枚
イセ 曉浦 駿六
 田を極をりくふい瀬の守うごころをい
大坂 瑞馬 駿六
 子ももふり貝をく穴はる清水うか
大坂 瑞馬 駿六
 可もき子もなきせと出たるそ物
大坂 瑞馬 駿六
 なる物のそきと暮の雲面を
大坂 瑞馬 駿六
 炭電のうへは消りり暮のそ
大坂 瑞馬 駿六
 解き力や焚おろくたる飯のそ

此七歌四下十四

鴨鳴るる船の夕のいろふりり
近江 砂文 駿六
 穂の本れをさうま形や後の月
大坂 瑞馬 駿六
 出さうりんまは萩根のよそ暮の月
大坂 瑞馬 駿六
 二見の浦よそ
大坂 瑞馬 駿六
 名月の出汐や沖のよそよきあそ
大坂 瑞馬 駿六
 月の外は強よなきや二見の浦
大坂 瑞馬 駿六
 なき星のわううさぬもなうりたり
大坂 瑞馬 駿六
 粟敷の森よそ
大坂 瑞馬 駿六
 森のそらや星の二夜もあそらん
大坂 瑞馬 駿六
 下るる杉のうごころかすこころ
大坂 瑞馬 駿六
 いつぬるともなく唇ハ帰りり

ちつ君の毎日降や諏訪の湖
 赤鷹の鳥や二北宮尾流富士
 淡高又鳴き鳥の啼く守りも
 喜多又涉田を歩む鳥うれ
 人啼く時鳥を啼く啼かめ
 鳥啼く松も乾くぬくぬれ
 入やすき月の影葉よかむ
 朝風や着るふ似く山の形
 引高を松葉さくくり松の穴
 葉はよふかけて松やの住居外
 鶴とハ年暮るくゆき暮
 竹齋
 駿六
 駿六
 桃林
 駿六
 成美
 駿六
 標堂
 駿六
 大節

批七次四下五

ちつ君の毎日降や諏訪の湖
 赤鷹の鳥や二北宮尾流富士
 淡高又鳴き鳥の啼く守りも
 喜多又涉田を歩む鳥うれ
 人啼く時鳥を啼く啼かめ
 鳥啼く松も乾くぬくぬれ
 入やすき月の影葉よかむ
 朝風や着るふ似く山の形
 引高を松葉さくくり松の穴
 葉はよふかけて松やの住居外
 鶴とハ年暮るくゆき暮
 竹齋
 駿六
 駿六
 桃林
 駿六
 成美
 駿六
 標堂
 駿六
 大節

駿六
 語溪
 駿六
 五来
 駿六
 秋拳
 駿六
 成呂
 駿六
 喜年
 駿六

常ふ梅をきき宿のすさきき
 之をりてと常きくぬききり
 鴨牛をりての原をゆく
 蝙蝠や茶をりて下河原
 出羽の月見山とふ西子若りて
 涼風の生を雨の月の山
 常はまを孫子くりり常の月
 ともやせはあふふ西を花の宿
 花さうりて今を競る人の歌
 さうりて嘆山あふより峰とてい色
 心をやあふふ踏へき山さうりて

魯隱
 琴州
 駿六
 近江
 駿六
 京大左
 平松
 亞溪
 駿六
 京
 六曹

批七次四下六

秋風をきき宿のすさきき
 之をりてと常きくぬききり
 鴨牛をりての原をゆく
 蝙蝠や茶をりて下河原
 出羽の月見山とふ西子若りて
 涼風の生を雨の月の山
 常はまを孫子くりり常の月
 ともやせはあふふ西を花の宿
 花さうりて今を競る人の歌
 さうりて嘆山あふより峰とてい色
 心をやあふふ踏へき山さうりて

駿六
 土卯
 駿六
 大坂
 尺艾
 駿六
 阿比
 仙風
 駿六
 長
 菊也
 駿六
 京
 蒼虬
 駿六

書を踏きく其年より多く山居
 六月 月居
 六つとりの記く又山居
 神楽や阿の事をす
 駒六
 玉屑
 けり
 神楽や阿の事をす
 駒六
 花散
 白菊をよみし浦の管や
 駒六
 葛三
 白菊をよみし浦の管や
 駒六
 左琴
 五ノ
 六
 武陵

此七於四ノ下七

横をとり人をうたふ守との七
 駒六
 竹老
 越中
 多形の松をよみし
 駒六
 壺伯
 五ノ
 六
 五尺の若人の海より
 駒六
 京
 双南
 六つとりの記く又山居
 駒六
 素檠
 鹿馬や舞のむねのほろく
 駒六
 関豊
 人の三季の本やま出り
 駒六

夕鳥やまきつぬ花のうらうら
 きのうやと七洲七船魚喰子なり
 雨の日八雲も柳もぬげりなり
 犬の座と形さく杜の春あり
 二声とかきりある麻の衣心
 けしききん花を写しきき
 月影や仕事よ煙ろ涉る山
 浮きよ月うらうらの水川
 生午の古松よ夕夕の日影
 月雲子衣つらすや竹の突
 空阿よふふりの雲とぬなり

分石毛
き駒六
う宇宙
き駒六
越竹里
き駒六
市蕉雨
尾春臺
駒駒六
京空阿

一枕七級四下六

あぢのうら毛よ漏れ湖の雪
 本かうーやとつさりぬ富士の雪
 富士の山をや鳥よあつうら
 蛙鳴泥うけいり高のぬ
 廣沢や九うきりたも海の水
 梅咲やまよれ雪の落らり
 春のや白いつき合ふ梅と標
 春のや雪や泥よも入るき清の春
 山ふ雪やあめくと春の霞知
 きー写しき山をけあき秋の雪
 きー写しき舟のわきき

京駒六
京春坡
駒駒六
イ呂兆
駒駒六
京芦涯
駒駒六
雄雄淵
駒駒六
京雲帯
駒駒六

蝶のりへ人もちさく見ゆるか
京 如毛
 蝶のりのりへもちさくすむ月面
京 月峯
 誰おらう山の井眼く暮るの鳥
音 駿六
 象先よき梅よきのふ蒼うち
音 春蟻
 梅うさやとく袖くあり峰
 駿六
 正月や火桶抱くう兔の花
 駿六
 四空の杉よ暮れく浪名
長 孔阜
 昔よ住ハ鳩の湖名と月秋
 駿六
 夕月の水の中よそ暮暮りか
 駿六
 月丸く名音丸くぬむりぐり
 駿六
 鴨一羽横よきれより音の月
 駿六

此七歌四十九

夏の来はなもも遅す山のうへ
カ 眉山
 怪子や風よそを家舟の上
名 乙二
 船中うと舟よ刀さり幟くま
名 駿六
 暮梅よゆあつけ音のお照外
名 對竹
 時高の南いたる江の暮ぬうま
名 趙島
 起ひひて、松よ鼻する男廉外
名 駿六
 唱麻のなまきうつたる山ニツ
名 花陶
 山ふたのうとく出さりぬふの月
名 春人
 小るよとくよありぬうとつふり
名 駿六
 銀月玉因横理ハやらの風
名 文角
名 良平

張りや炭火のほたる松の風
 五郎や木うらふらむにの松
 青柳のや木結子やちりぬつき
 首の露もこやぬきほひうか
 春の柳や手小提をけり豆代茶砂
 出ぬすぬ存りや春のうらうき
 初丁を二巻子配れ伊勢尾張
 思はずの物の影をやりうき
 仮初の物のあやを居るの露
 炭俵つきの月出るまほひ引
 みか人の知れし移りし言り

駿六
 推巴
 駿六
 堺茂良
 京雪雄
 駿六
 江巢兆
 駿六
 泉二

狀七於四下干

あゝぬくやうきすた志ぬ
 毎いあり
 山鳥意徳和尚のよきあへりや
 希そいとまれくされ
 あゝぬく世すけれいらぬ山橋
 人老く海山木の志ぬみぐり
 花見ても日暮ぬ先ま席りたり
 昔懐の泣きあそび水鶴うき
 いのち祖父をたすり門下格
 時の白きり夢傳へたるまよ
 夏ふいしや

梅笠

果右衛門の序

今やういへば海をこえていふはあまの志はぬたの
つらきことなり 性素を多量ののこすは
おもむきを折るゝ吾妻あしきし
経法をく志けしと 幾も播磨練法
友を南総のいのちの跡をたてるか
乙女ありきなり 書を並へて
申ししききなりなりなりなりなり
の再月より起よすなりなりなり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

批七款早二王

手紙を

名古屋の事始りといひてい
やうしてゐる。たゞおぼろげに
のちの甲の毛曲の事にはあつた
事もある。さうもう一つもは
あつた。物さういふとあつた
その事などはひく。追悼の
いふ事などは、國家の事、
その事などは、いふ事、
いふ事、いふ事、

七七四下廿二

切れたる

一巻の事、仲の事、封紙

外月、ちか日、雨のたぐ、
よりの、雨、始り、の、事、
お、紙、で、封、紙、の、事、
さ、う、の、事、の、事、
た、く、さ、の、事、
い、ふ、事、の、事、
さ、う、の、事、の、事、
い、ふ、事、の、事、

かきくゆり

ちよつと鳴く鳥のこゝろに雲を

五雄

三室若木林とうやりのるるの

脊をそえ同くうらむる雲

よ入家乙因々ふをん高嶺山の

そいつのせいでく翔たつ夕暮り

いとうか

若みよやく 雲書考なく 膝を膝が

大節

批七勢四下世三

その根子かくせそてすん果古香

乙因

月下清ゆく露の弁のうら森

對竹

藤は深をそく流せよふて

太節

けしきもくた家庵の物

五雄

に返しく障よりの面

岳格

枕味唱の居をほく心煙火

松兄

衣ぬいそくち度たたら学のよ

松菊

亀の歩けりも志つらなりけり

大商

於室空のまききみほひはまきまて

吐山

雲々解くや風子かろりき

竹有

蒲公よ乞食自慢をこきちし

士朗

まらけし子孫ふ月のさねくらに
林とたき木も晴をこめつらん
いりよ野の春をきみりうき
八重海橋を越りのかここめ
のそげを登りうつれ人。秋
ゆふ雪をよみ一志きり花うら
田のうらなくと申は古口持
免つらうやそせねるの猿の面
ねくも小三輪よまらうむら
きぬくそを結も雀よこころ
扇よりかきいれ 糸の髪のとめ

大阜
大巢
梅間
すみ
国水
鹿野
黄山
九峯
梁臺
更者
朧来

批七於四下世四

誰のこり舟舟子笛を吹も夢夢
いふともあくけの流り
白照出粟の風も見は出る枝よ
志つらうまゝの癖をそえ
豆腐もちちく海やもきり
戎智もくはもさつ枯のきり
はあかりと昔もさるもさき 山のと
とくまの 雲をゆく家 松 吟
世のまらよをうき名をよほよん
嶺より追ねるもあつ 膝よ うち
岩山の丸くならほとあつ 吹

東陽
沙鷗
月底
永完
青峨
谷卧
津手
阿城
左雀
土道
湖風

夏よりとくしと何とらるすまき柳

雨節

むすしき花をよみよまらぬ

大蘇

離の小神も志ちんらやあはる

海且

あはれとすまき柳

阿久

あはれとすまき柳

若手

あはれとすまき柳

谷相

あはれとすまき柳

青丸

あはれとすまき柳

山田

あはれとすまき柳

山田

あはれとすまき柳

山田

あはれとすまき柳

山田

批七於四下世五

閑たをのすまき柳

士朗

孫六うち力うりきやつあぢき

松兄

可幸一知名の山のたくりも

大商

あぢきうりきやつあぢき

鹿野

はるのたをのすまき柳

松養

あぢきうりきやつあぢき

阿城

あぢきうりきやつあぢき

可青

あぢきうりきやつあぢき

竹有

あぢきうりきやつあぢき

硯静

あぢきうりきやつあぢき

梅間

あぢきうりきやつあぢき

黄山

栗古鳥やどりのたきる堤葦の糸
 むぎのほほよさうそくまのり鳥
 りんご鳥をけりけりくむん
 多武雄鳥を勸修寺の鳥の月
 閑古鳥さうそくま重ハをうくし
 けのほのほゆく落ちてかれこ鳥
 かむこ鳥を森のこちこ月軒介
 佛よも耳ハくまがり栗古鳥
 栗古鳥やまの義成の堂のこ
 人の鳥を同じき鳥うんこ鳥
 鳥やしてまゆる栗古鳥のつら鳥

砂牛
 桐毛
 更着
 圃曉
 大阜
 野高
 素月
 野秀
 蘇下
 湖風
 嵐峯

一紙七於四下共六

栗の戸やねをたけつ栗古鳥
 お月あやましくまゆる栗古鳥
 栗古鳥をこむんこ鳥かむこ鳥
 栗古鳥やまの義成の堂のこ
 可成庫鳥をまゆる栗古鳥
 多武雄鳥を勸修寺の鳥の月
 閑古鳥さうそくま重ハをうくし
 かむこ鳥を森のこちこ月軒介
 佛よも耳ハくまがり栗古鳥
 栗古鳥やまの義成の堂のこ
 人の鳥を同じき鳥うんこ鳥
 鳥やしてまゆる栗古鳥のつら鳥

大蘇
 五道
 躬貫
 文阿
 駄六
 彫蕪
 北未
 武三
 珉土
 意逸
 秋国

のむいなるきとくしきき海山
今花むく名り山後うんこ名
屋守寺の壁のあうさよ果右名
果右名やうさのあ乃名の海と
明子以きし海も又くは果右名
うんことりけり果ては果右名
果右名松はうつもろゆふくあり
けりやまは海は山後果右名
うんこ名油きたる相りふか
ものいばぬ果右名をよあかんこ名
果右名鳥は海を果右名展りりり

青嶽
葛井
兔洲
岸をき
すこ
国水
可玄
佳雄
浦且
左雀
有残

枕七の四七

果右名うんこ名のうんこありつあ右名
うんこ名虫の涌た果右名白田
松右名のこけりく海は果右名
果右名を果右名果右名てあ
果右名さば人果右名すれうんこ名
果右名や山用果右名果右名の峰
いさ果も果の下禁んわんこ名
むいなるをなとくしきよ果右名
うむこ名海は小舟も右名を
山子果右名た果右名を結くあ果右名
南きり人の果右名は結似うんこ名

三四
月底
一草
駈六
栗大
都水
柏亭
墨熊
吐山
二虹
揚洲

夢りしの笛は竹なり果古なる
 曲きこ祭ハ心きりよ鳴る果古なる
 吹曲の音もさけハ鳴るより言古なる
 吹しより先ハ飛りり果古なる
 たりきうらハ心残るさくくんこ号
 昔はとよりけハ何んん果古なる
 一もあぬうき夢のあた果古なる
 飛ふことも南之く飛りたりん号
 果古なるなくも縄ふ菓一一把
 加せこやりもも踏を釣果古なる
 かつきのとらら面をのをの

枕七歌四下廿八

夢りしの笛は竹なり果古なる
 曲きこ祭ハ心きりよ鳴る果古なる
 吹曲の音もさけハ鳴るより言古なる
 吹しより先ハ飛りり果古なる
 たりきうらハ心残るさくくんこ号
 昔はとよりけハ何んん果古なる
 一もあぬうき夢のあた果古なる
 飛ふことも南之く飛りたりん号
 果古なるなくも縄ふ菓一一把
 加せこやりもも踏を釣果古なる
 かつきのとらら面をのをの

沙鷗 谷卧 桂五 三河 岱吕 日 卓池 舞 翠川 日 推已 日 孔阜 東陽 少汝

寺河ハ靡もさくは可んあ 名 八峯
 蟬丸の彦を何くはなふ古名 永宗
 かきこ名なくやあまこむ暮の夏 菊居
 孝子も傳九月も人う言の末古名 里相
 赤の山草よは暮れたが之斬りんこ名 金谷
 関古名余の名う身と連さり 蕉雨
 りんこ名も笋おてもやりりり 日 崔左
 大古名の松も言りりり 日 徐艾
 名も言りりりりりりりりり 日 何頼
 常木の名りりりりりりりりり 日 三都良
 名りりりりりりりりりりりりり 日 壺伯

紀七次四下廿九

東初りりりりりりりりりりりりり 雁亭
 りんこ名もあの名りりりりりりりりり 出雲 蒼菰
 こ因死りりりりりりりりりりりりり 東武の巢兆の言りりりりりりり 巢兆
 りりりりりりりりりりりりりりりりり 巢古名りりりりりりりりりりりりり 巢古名
 こ因をりりりりりりりりりりりりり 家古の伝りりりりりりりりりりりりり 乙因
 りりりりりりりりりりりりりりりりり 乙因

善者一 地産の山もの青 櫛 乙因

常夏のこのね さらさら姿りか
ちるるの門のそきり 葉臺の
蝶舞や沙草のくぬ耳まつく
陽まらや中しほけい遠かやふらふら
在る翹や女あらしの竹細工
比奈道の袴を色くくぬぬり
ちるるねやふらふらゆきふらふの下

夏

常夏のこの山所を色浅なく
一風清あふらふる扇のくさやう
うのふらふらや巴のくさやう

批七次四下三干

保連流あもぬぬりそり利やまの流
松風より引移り切り松魚りか
常夏の葉の風結くぬふらふらぬ
旗のふらふらやふらふらふらふら

秋

身大いふら枯の袖風うすうをり
枝もなき枝ねをふらふら秋の風
萩のそ風もたふらふらふらぬら
まつ丁やされハ萩吹このゆらゆら
白川の霞あふらふらふら相撲うれ

大津路の鬼をさるるも秋の虫
牡丹花の牛しよりりる花は

冬

松の葉や仮初まに降しられ
しるしりゆきよ葉葉の二つ
ちしりくと木の葉を降日そそ葉を
風のおもむもあそぬ吹やううか
東に下るるや情子のつらも葉の宛
道中へ乾きたる里の楮火の光
初雪やいそけをきるの文使
そつけと中く焼く雪のさる

枕七次四下三

もとをふしは自木の事を
とりとかい課あたる美昏は
角そねもひけくら家
書白やえん葉も唐も閑古音
魯堂

文化四丁卯六月

岳輅揖

文の目上り六月 世傳

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 世傳 and 文の目上り）

世傳 世傳

名を〜 影〜 亡人
相見うひせうふ機をわけり
きこまありと〜 木犀花を
傍ふ日者子所 丸いふ子い
素父の莫逆の友有りあふきを
次〜 母の心をよとむふあそ
自宮〜 森樹の宮よりう〜 己
傍らにあきさすも其せつをう〜 哉
家うのてあきをゆ〜

石の草

たよひぬ

自文化六邑秋

著く卓池花

略此の秋風

松兄

五日乃風

十日乃雨

松兄

五日乃風

十日乃雨

松兄

五日乃風

十日乃雨

松兄

五日乃風

十日乃雨

松兄

五日乃風

十日乃雨

松兄

五日乃風

十日乃雨

松兄

五日乃風

十日乃雨

松兄

五日乃風

枕七勢四下世三

とふもろくおも 湖のさひりき
有てなき事を みるそは 泣やん
目ふ字らしを 残す 雪掃
まじりろ紀 くるる 指 序
阿け田の幣を ちるる 早 湯
ふすふをうと 姿を かくたす
まじりろ 啼 雛子 不 姿を 新
ちつ花の 深 山 曇を 煙らん
歌 草の 口を あける 夕 くれ
幣田 規 志 ころ 幣 田 又 為 来 て
二重の まぬま 津む 張 笠

兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗

批七於四番

初りぬの 笠の ままふを 折るこい
麻子すこらの 大 百合を 賣
西田 寺 歌 けり け 佛 へ 連
温泉の ちるる 不 務も せ 来 ろ
山 駕 々 終の せこい ぬ けたる 曙 又
面 格の 来る 暮の 舞 舞 来り たり
其むろ 海人も 彼を ひるる
出をろ 乃 神の くるる 誰
秋 風 の 月 以 起す 暮 海 くら
今 昔の 麻子すこら けり 不 務
續つる 後 の 彼 岩の 明日 八 有き

兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗

黍植粟植を新ふ 運人
川、多ふとくむし、新を引よそ
機、以糸の方をうらに、
高うき、の花をき、以の、新を、
会、負、ね、く、出、る、き、り、き

兄 朗 祐 朗

雪の白し、
月と日の、
春の、
秋の、
冬

兄 朗 祐 朗

批七於四下世五

雪の白し、
月と日の、
春の、
秋の、
冬

兄 朗 祐 朗

君の記念の小森くられ
念仏の拍子、背てありき也
いろは教つる物成の一ツ家
黒犬の喧流止る臺の内
芒ハ露はあらわれおぼや
雪陽のほは白粒の色す
四ツ子なり字は春をひく
そのまゝをまじるともん
花の浪
お修はむある 古き
さるの 春
ふもめと小倉の鞋
進歩り
玉ち下向のあらる日
の 春

朗 兄 務 朗 兄 務 朗 兄 務 朗 兄 務 朗

概七幼四下冊六

百姓の鼻、二丁、吹也
あり
鳴子あしとすき、橙の
君、
嵐次西院系、侍々
〜
練のうしろ、柑子つら
〜
腰、けのやうな、雲
をさく、出
草子、ふゆ、山、や
〜
き、す
水、草、月、も、生
草、よ、さ、む、た、く、夕
を
系、ま、う、ろ、る、和
傘、の、浦、浪
舞、舞、舞、る、輪、上、
紅、舞、を、や、り
務、の、系、は、目、を、
る、圃、の、戸
目、の、系、は、双、我、
は、ふ、く、括、ふ、ん

兄 朗 務 兄 朗 務 兄 朗 務 兄 朗 務

神のあはれに長ふそりり
四下もたつたらくも花のな
胡蝶おそ子母極る等 為
みよこま月澄つくる雲の水
佐工もひてそ傍麻すりも

松兄 松兄 松兄 松兄

松兄のあはれに長ふそりり
四下もたつたらくも花のな
胡蝶おそ子母極る等 為
みよこま月澄つくる雲の水
佐工もひてそ傍麻すりも

松兄 松兄 松兄 松兄

批七終四七七

清見の中り歳むれりあり
まむら文扱たる身を踏く
急の船すする朝魚の花
吾解のひかりを鵲の月をけ
水より流す秋め山あり
遊くよよとと蓋とる飯の泡
揚ふもあつと舟の船方
大木とほめそやしたる茶喫
白蚕と面をぬもは毒の口
常より水すくむすひあけ
人をやこいそと腹引をぬく

兄 松 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗

批七於四廿八

阿くお障氷見の莖市とそり
糠の匂方をくくは 松芦
飲城ハ眠るるもあつてよ
月く出さうは泣けり
きりくは砂はよ厚し其よ三
茶の本の上へ書ふとあり
夢のふきを覗ひすめくば
志かきの男をさそふ 松芦
鳥め、鹿の板を踏こく
野走廿日のまつくちの
あうり大やき候をこよす也

兄 松 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗

牛車一しんり味をくくる
笑ふをうらなひのけい賣
平井をわく山吹りほく
塗筆の腰さきさする花曇
袴もなきぬ蝶多の児

朗 格 兄 朗 格

あけやのく春よりよまとのもほ
月と花とをりよりうるお津が
春の来はむつよき風情は
春よよと人の極たる様は
そのいそめむよき言は
との花影あふもるは花を
輪うまりや梅よもひよけり
梅さくらや春くふる花の穴
梅さくらにほたくは春の梅

あけやのく春よりよまとのもほ
月と花とをりよりうるお津が
春の来はむつよき風情は
春よよと人の極たる様は
そのいそめむよき言は
との花影あふもるは花を
輪うまりや梅よもひよけり
梅さくらや春くふる花の穴
梅さくらにほたくは春の梅

岸杖 雄 渡 松 元 長 身 長 身 春 春 玉 屑

批七行四下廿九

小供等の一むらじは梅の花
 老つては花でもなくうめの花
 門ちくくもは梅の花
 半馬は正月をもち梅の花
 船鳥やふも屋敷の東の尾
 あきくは花をよみはるより
 朝鳥は風のうらぐき雀は
 松ひすては子の花はくまひ
 小庭の花をまひ白の殿うは
 葵の美とあつけくひと
 ちいさうおひるをやあふ

批七次四下四

本海
 仲介
 松兄
 茂良
 巢居
 松兄
 明女

小供等の一むらじは梅の花
 老つては花でもなくうめの花
 門ちくくもは梅の花
 半馬は正月をもち梅の花
 船鳥やふも屋敷の東の尾
 あきくは花をよみはるより
 朝鳥は風のうらぐき雀は
 松ひすては子の花はくまひ
 小庭の花をまひ白の殿うは
 葵の美とあつけくひと
 ちいさうおひるをやあふ

百重
 豊潤
 小宮
 眞事
 菰呂
 曲美
 米春
 士朗
 味入

春のよき芳しき花なり

あやうりよ事やたそよ花よ又と逢

松凡

まのつすむすするほくと安りむる

月花のよきりさの物池の舟

ちよのらもせはよくまねす花の陰

米考

花さよりさきくぬる人の氣

西溪

大廊吉よ傘ハもくぬ山桜

岱呂

ともくくもりきよは花よまうは下

旭亭

花よあうぬるめらさうう山

松多鉢

そくくともんせは標の之花のち

魯陰

牛橋よ船風志ぬる菖蒲が

百堂

批士於四千里

訪隠志

何くも昔を夕貞の花のつ

鹿野

伊賀の玉よ往くる傍の常一よ

一食のたくく人なく人のみ非時

歩りきりよぬるのこもて其日を

そすくされたるある人の訪ひて

つふは唐ハ四方大河わして水

日ハ何をうたてたせたまひくると

又ハ尋巻のこものなり食おの

なりりーとつふ日ハたあくすとそ

あえられたる心ふよ十日廿日は

かなむらゆきまの只口をおきま
 母にねを志りと乳房をあふ
 けり出るぬきりたんを志りて
 食物をむさぼらんやあさりま
 せのせとりたり
 口噴きまをせ八屏目紙をよき
 くらこんせはるるりり山さくら
 うるさを思癡まハ一たり山橋
 旅のまの十日もらつハ一連さくら
 夕くちや宇奈入ぬものうらうま
 香を踏てま葉まおとく山橋

松凡
 宗巴
 吐火
 瓦城
 石毛
 月居

枕七歌四下里三

白ぐいのまや胡蝶の一争垣
 ちむらやあもひらり血の花
 佛生ゆて十日もたれぐりの花
 菜の花やまきりりりや雪鳥
 春の花のかさなる山ハ橋丸
 花まきな菜の花の巾や橋の花
 花まきりりりのまきりりを志り
 菜の水のまぬ浮世や宇奈の花
 津まきの橋まきりりや花のま
 ねく山ハ橋り降やう一連さくら
 けりまきりりり花のすまれり

鳥翠
 夜亭
 松凡
 六曹
 珉上
 松凡
 汝菜
 朱起
 天老

腰乃法螺堇津むはびるき

乙二

月の影にそよぎし房の
花小虫く揺るあらの俳を
手折日もなくてちりちり山橋

松兄

走井 子

水は流ひけりさのり山さくら
ちらくとするや芒ハ萩のもの
花芒のさくらをのり風の秋
いころやするとかたは筆を
あつきとや赤糸の虫の這ひく

ちり女

外六

墨山

牡丹

漫

七
七
四
四
三

白菊をさしおろふの風情
里の子の若葉菊よりの九日

松兄

山吹は梅りなくてい色ら
山吹は梅りなくてい色ら
山吹は梅りなくてい色ら

たれの家よ佐せたやふ
世のふりふりぬきぬきの
金きぬぬきぬきの
後くをり

終人ハ何リも是を不クキル
 時多ク新ハ湖水の岸新ハ
 不クキル初秋の陸ハ今もつく
 巴ハ分ハ縄引キキルハ何ク糖
 雀鳥も事ハハ回ルも極多ク
 當ハ留守すも極ハ鳴ノ雀
 うくハすの右白クも花の小多ク
 赤唐也昔ハ子ッ溜ヒル川
 うくハすク糞するりこよ解の上
 當ハ志ハも雨ハ月ハ事ハ
 終子の屋のホレクも也三筆出

黄山
 祖凡
 左雀
 八千坊
 三津入
 方明
 馮月
 野秀
 日入
 松兄
 大鼻

批七款四下五

生約ハハ林ハは也あけ雲雀
 棟あけハハハ人合て啼キ雀ハ
 赤鳴クも暖ムクも下稻すハ
 多ク色のうハハハハハハハハハ
 かんハ色の豆ハハハハハハハハハ
 茶子多クハハハハハハハハハハハ
 孫ハハハハハハハハハハハハハハ
 書ハハハハハハハハハハハハハハ
 多ク山ハハハハハハハハハハハハ
 水色ハハハハハハハハハハハハハ

翠川
 五束
 鞍凡
 其白
 竹堂
 松兄
 五雄
 卓池

批七款四下五

元日ハうきや二日ハ面白
道もこの柳を志く竹馬式
書かぬ海人まじりてやなく
人日

文左
古猿
圃曉

老ぬまハよき小喰ぬ芥菜

素架

元日やせんうらうき東山

松兄

芳道兼平は若むす高の春日

書かぬを水まうらうきハ何小所

書かぬをみおしんたり猫の意

藪のや類白類春の筆揮て

書風や伊吹屋のよとて能く

智国

枕七歌四十四六

そのつすま下て面白や春の風
書かぬやをかりふ書かぬ春の坊
書かぬやよふまもつたり法後しぬ
書かぬ書も言まふ多すハおりのうち
やん書かぬの言ふまやハ船の舟
書かぬやハ春よりささく筆
衣久纏しと母のつらひひ
ささくれや靴のぬけさる人の白
あつす日や柳くおふ星の砂
蝉やうや子供のを居た靴の若
江に流るや筆さうらう夏書

此を
久角
其暎
尺女
一之
太節
松兄
吐山
巢兆

鏡もく存鏡なくもうれしき多
人の扇もくしと思ふおもあふ
永き日の汐もくし海で隅田川
り喜多おぼつらなきよ 枕け
餅もすき屋よを林を田打
老せにを過さくものを喜の水
鳥愛ふる竹のけしるを殿
よ 四葉納涼
くまてり山河をくしを夕すく
雲のくまてり石波の雲家を
萩の風仙の何とすたすく

花叔
冥心
玉之
珉屋
松兄
八重
一之
天女
河洲
世竹
硯静

批七款四下四七

旅人の萩芒より衣をり
萩の多風の中より夕へり
おぼすくすむ八梅もくしより出の雲
掃不ともる雲あり障りなり山家
笠帯本の花多中より今朝め杖
お秋やまき雲くさむき障り
念似も扇とをりゆき 硯
をて星のゆりくさむよもるり
朝白や禁れぬくたろ 竹の
雲川の橋りりりり秋の風

田本
有磯
五重
葵亭
松兄
可都里
柙荘
曉南

丁卯七月既月梅花園の妻
 みををむく其数をいしくふく
 みるゝ八幡橋の古殿白首の
 ついで一白井の桂玉帝定の岳格
 流癖の少少なり強まつゝある
 人の鹿野天を葛井大藤五道
 五雄の徒なりおの日の受延よ
 梁田の早稲のいすゝも喰
 さるをいふ詩の折のきりよ
 洗ひ不二の宮ト一の花のこゝ
 みるゝて蓮の花をほほほよ

批七終四五六

濯てあきをこつむ酒ハ伊丹の
 白茅の海の小海を蓮葉
 鶴の蓬よのせてそ出されら五老の
 翁終日の宴よを子と園中の
 月よ散れら玉母の梳は破るつゆ
 みるゝ面おのくあのおむやく
 みるゝをともく赤屏居委兄記之
 みるゝりハ皆家父よ玉中つて
 七夕ハ美世あの花の夜なりや
 七夕やほくよう並ふ妻の
 縁よ三日もあきハくを蝶のさる

松尾
 万和

夏の東はくまもおるに山のこ
をその堂印もとてははるけり
川舟のそは海へまかりま業橋
笠の若葉何ほくもや雪はて
すつをさくま中をすしきまの面
如屏や寺をみんをさる京のま
まやさくの法はまよなり涅槃像
あつりさやつりまのち砂の中
うけろくや松をきてはるる貝の口
すまぬやうにく見ゆか人筆の歌
芳田の櫓うけうらをりんさ

眉山

介亭

祥禾

奇淵

松兄

蕉雨

東陽

梅間

批七終四下四九

梅七終四下四九

梅をほすは梅もをほむはあ
梅決の泥のまこま
うーろむく宮ま死づく蛙うら
お天をまよもよもを福をんのみ
桑柄抄もうほむいこ山のま
なもるあのおをさ梅猫のり方
夕しやまさくねもあまけい存
本うらうら吹くも松ハ松の風
本うらうら小梅むむけり牛の角
相大楠一木風のあふりくら
小陽くく梅出すものまのる

松兄

梅兄

梅兄

梅兄

梅兄

梅兄

梅兄

梅兄

梅兄

梅兄

梅兄

今宵のしらひ時や冬ももり
仏よハ三輪たもぬ 疎くもき
をくもちあつこりしやれ 疎く
祖父はあつこり白髪光り冬も
庭ひりりもろく 湖氷のそり入
ねくつろく 庭をふもたをく 雲の朝
田をくくくくくくくくくくく
古鏡子名を小瓶と名ふりしり
まろハあつこりくそ 疎の疎もろも
膝に疎やそ新一把もつふたけ
門をくくくくくくくくくくく

秋玉 砂文 松兄 風流 冬基 幸東 稲洲 兼也 推巴 栄貞 左琴

批七終四下平

任の江の若子浪をき 解まふ
金谷をきをきまふ 一と回りて
旅立日いふりし 十五日なり
又にまきりしをき 傍の原うま
細々の極すくくく 山家外
押秀亭よまふも 画紙抄の
首をきをきハ例 舟中書
物くくく 傀儡のをくく 書正
旅人の足のとをひ や疎のまろ
雲子くく 文抄の所中の 中とをれ
たろふをくくく

布舟 松兄 兼也 推巴 栄貞 左琴

所中の山もなれど涼うか
 清水よりよあ何そし春の春
 夕立の袂くつる板うか
 中ふるもあや樹火持とまなれに
 夕立の袂くつる板うか
 月よ麻秋よ不足のあらはくそ
 弟の事も事ぬ日や夜のきりくは
 親よふるも月よ月よ鳴あり
 夕立の袂くつる板うか
 とたよ葉くさり記跡ハ月夜に
 夕立の袂くつる板うか

菅岡
 夏叟
 武陵
 浦旦
 山人
 花喬
 九岳

批七初四十五十一

秋の葉もなれど涼うか
 清水よりよあ何そし春の春
 夕立の袂くつる板うか
 中ふるもあや樹火持とまなれに
 夕立の袂くつる板うか
 月よ麻秋よ不足のあらはくそ
 弟の事も事ぬ日や夜のきりくは
 親よふるも月よ月よ鳴あり
 夕立の袂くつる板うか
 とたよ葉くさり記跡ハ月夜に
 夕立の袂くつる板うか

松兄
 菅岡
 夏叟
 武陵
 浦旦
 山人
 花喬
 九岳

橘良

喜年
 如毛
 希言
 豆豆腐串
 水
 松兄
 素月
 松兄

批七幼四下五十二

結実の白登りよこに生海苔の
 高
 大蕪
 麦河
 不卜
 松兄

味阿り月ハ
 味阿り月ハ
 味阿り月ハ

不二の山 名は恒不妻よりして
雪はかりつゝといふれたる地し
そらき

茶臼 巨匠も白く不二の山
おろの地は亀の風よふりの山
煉掃しては白くもとの山あり
大仏の鼻 とうとう出たり煉掃ちうひ
緑竹園餘千枚の賀庭は松也
年も名も清くくわくはるる

名月はとうとうおともふん事也

少法
葛井
松兄
松兄
桂五

批七款四下三三

松をのち食多そめく秋の月
ひまのいふ月を淋き以く南
ひまのいふ月を淋き以く南
山松の古きすうくそまの月
煙ありまのち和畠のまの月
まの月本つくとせのいふ月
まの月和馬うらよふ川むら
月すくくそふ葉てぬまむ瓢
櫻の葉いふそまの月
とうらうて移すそめもの月
四ッ辻や四五人まの月

空阿
帯梅
松兄
緩貞
鹿介
松兄
一州
一左
外史
壺泊
松兄

批七款四下三三

あはれくさや眉よたかたぐふの月
杉の葉はるをきひきより後の月
暮の月つ田の庵をこつらゆり也
精るはるをてくをあれ船の月
思ふとさふらり移るはるの月
戸にのら草の浪花や冬の月
湖子水くさよりそふゆの月
月子あふ尺の草のへそよより
香くけの流るをるんを冬の月
葉の花のひらり送むるはるの月
好むまよこのをれはるを夏の月

文曉
其成
于當
湖凡
渡草
蒼虬
五道
双南
儲史
つう女
大商

批七款四玉曲

山を歩く四角人月のさうり外
何ゆつよ人ハをくを冬の月
おふゆくおまをたをふゆの月
名月や砂のあゆこのをてをき
暮の月むくらんをまや

日歌
蛙聞
松兄
岳輅
標堂

批七款四玉曲

山を控ふる山ありさくらり山路哉
 花散る春するとくくのの水
 雲霧の巻の峰をさしにみくくして
 家ハ古風の軒ひろき
 鴨舟桶よ小菖蒲の白ひやるしん
 塙帯ひくくつ借くくをきや
 籠衣美玉の塙をよは傍亭
 酒は三三笠の山うけをくじ
 本くくの中は押合ふみそくぬ
 雲のむくくの春うけりなり

士朗
 松兄
 岳輅
 明
 兄
 皓
 卓池
 五雄
 蕉雨
 秋乳

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

枕七初四下幸五

あつげあき岩子錦袴脱くけく
うさのみまのふの地中を 位
多筆の海あうまを恨つて
五月の山は洗ふらん 髪
龍鳴の木の根の乾くけ
苔のむしたるふをつりぬ
梅の花赤心とをうりまおきて
春の月夜めあつれなりらん
鴨くろく勢田の町あめ障の亭
土田よ蓋をうりて 山伏
雪のふよあうる 具足のちきれる

朗 兄 池 雄 兩 采 朗 兄 池

批七終四下五十六

くまのつるい糸陽花の 歌
おろすの指を舞う程をさすれ
むのあもつふあを たさく
山吹の秋の障とや外ぬらん
いとこの本をさすらんれの月
朝鳥の雀門 苦子押しつき
誰う持たたる 汐やまこりも
糸の燦あかりなきにやまはるや
松さひらうる 沼柳のま
下結くくくすられ 橋を遊歩の
日和くよさに 因、糸をやく

雄 兩 采 朗 兄 池 雄 兩 采 朗

春のつらきありとるやれハ水の長くま
 喜するもの皆喜き柳よし
 花のさけい鳥も嬉しくり
 ましく又糸とつりふの房
 柳の葉は風に吹かれ
 池のほとりには花の香
 文化六年
 己春三月

兄 池 雄 出 池 出 池 出 池 出

批七款四三事十七

